

を眺めて做す處も無く唯徒らに袖手傍觀するのみで有つた。

(II)

かゝる狀勢下に我等製鐵所従業員は官營事業と云ふ多年の安全地帯——よしそれは嚴密な意味に於ては假想で有つたにせよ民營會社と比較的意味に於て氣持の上の安らかさが有つた——から民營々利經營の嵐の中に投げ出され全従業員の不安と脅怖の氣持ちは期せずして單一勞働組合結成の熱望となり。十余年來對立し來つた同志。鐵聯の兩大組合を解體し、末組織層を包含して茲に日本製鐵従業員組合を結成したので有つた。爾來一ヶ年、我が組合の運動は當面緊急を要する問題を處理する外は専ら組織に全力を傾注し全組合員協力よく總ゆる困難と戦ひ今は既に支部を結成せるもの三十、尙數ヶ工場に支部結成準備會をもち、全工場に亘つて我が組合支持の熱が昂まりつゝ有り、所期の目的達成までには尙一段の努力を要すると雖も結成第一年度の仕事としては先づ成功で有つたと云へよう、然し多年の政黨的對立、組合對立、個人勢力の對立、そうした難多な對立感情は一朝にして解消すべくも無く、組合外部に散在し或ひは内部に残存して此の疾患は尠からず組合の發展強化に種々困難なる事情を招來した。これは我が組合今後の發展上最も注意を要する一点で一日も早くこれが融和解消に勉めると同時に常に組合の内部的補強工作を怠つてはならぬ。

此の一ヶ年間に於て一般情勢も著しく變つた。日本商品の世界市場進出は先づ印度に於ける綿糸布及び雜貨に對する高率關稅をキツカケに南阿地方に於ける雜貨、米國に於ける絹糸を始め其の他歐洲諸國に於ても日本品に對する高率關稅、輸入制限、輸入禁止等が行はれ遂にはソーシアルダンピング問題さへ惹起するに到つた、かくて世界市場に於ける競争の激化は國際關係の悪化、戰爭の危機の増大となり、それは懸て軍備費の過重負擔に依る國民經濟の破綻を招來することを想ふ時に今や輸出貿易第一主義産業經營は自ら批判し自重しなければならぬ状態に有る、輸出貿易然りとすれば高度の生産力を擁して、國民購買力培養に依る國內市場の開發なくんば既に我が國の産業には一抹の闇影が投ぜられて居ると云はなければならぬ。

(III)

齊藤内閣は岡田新官僚内閣に變つたと雖も國民生活窮乏の政治的打開は殆んど望み薄で有る、加ふるに北は水害南は旱害で農村の窮乏は著しく、不作に依る米價の昂騰は一般物價の釣り上げとなつて生活負擔は過重じつゝ有るにも拘らず我が製鐵所の如きは今日既に勞働賃金は固定状態に有り、一般的にも勞働賃金の上昇は極めて緩慢にして生活の不安は擴大する一方で有る。かゝる時に於て日製八幡製鐵所は第三期擴張(三千五百萬圓)を發表した、我が製鐵所に關する限りに於ては非常に華やかで有るかに見へるだが此の第三期擴張にしても昭和十一年には完了する。また今日景氣の最大要因をなして居る軍備工作にしても其の主要な部分は今後一年乃至一年半で終息する。それに國際關係から見た貿易の前途、國民購買力の現状、景氣の凹凸現象、農村經濟と都市經濟の矛盾、等を考へて見ると今日の景氣または景氣政策なるものは如何にしても心細い限りのもので有ると云はざるを得ない。沈み行く夕陽と云ふか、散り行く櫻花と云ふか、美しき中に一抹の不安と寂寞を漂はせて軍需インフロンは進行して居る。こうした中に我等は全従業員の大團結と産業協力に依る勞資關係の樹立を期し、國民生活を毒する一切の不正不義を排し國民總和の健全なる産業經營と生活の向上を目ざして明日の希望に燃へつゝ本大會を以つて建設第一年を終へ、更に勇躍第二年度へ突進する。

昭和九年九月二十一日